

## 『量評釈』の帰敬偈について

木村 誠 司

## はじめに

古の思想を学ぶ者にとって、唯一の依り所は現存するテキストである。しかし、現実に目にしているテキストが書かれた当時の姿をそのまま伝えていると、単純に信じ切っている人はいないであろう。オリジナルテキストは、いわば屢気楼の如きものではないだろうか。オリジナルテキストを目にすることは永遠に出来ないのではないか、という危惧を常に抱きながら、とりあえず、残されたテキストを読んでいる、というのが現状のような気もする。そうした危惧を、いささかなりとも解消しようとする学問が、文献学なのかもしれない。筆者は、その種の文献学とは無縁の人間であり、何らの知識も持ち合わせていない。故に、筆者には、テキストの当否を云々する資格は全くないのである。とはいえ、以下で述べることは、テキストの当否にも若干関わることではある。

ここで、あらかじめ、正直に告白しておかなければならないが、文献学に対する素養を欠く筆者にとって、興味の対象は文献学にあるのではない。研究の途上、偶然にも、あるテキストの一部に関して、「それが本来あるべきものなのか否か」という疑問を持ったにすぎないのである。以下の所論は、文献学的には混乱を引き起こすだけの無益なものかもしれないのであるが、あるインドのテキストの帰敬偈について、その当否を考察してみることにしよう。

## I

本稿で考察しようとするのは、ダルマキールティ Dharmakīrti (600—660) 著『量評釈』 *pramāṇavārttika* の帰敬偈である。まず、当の帰敬偈を紹介しよう。

vibhūtakalpanājālagambhīrōdāramūrtaye/  
 namaḥ samantabhadrāya samantaspharaṇatviṣe/  
 rtog pa'i dra ba rnam gsal zhing/  
 zab cing rgya che'i sku mnga' ba/  
 kun tu bzang po'i od zer dag/  
 kun nas 'phro<sup>補注①</sup> la phyag 'tshal lo/

分別の網 (kalpanājāla, rtog pa'i dra ba) を離れ、  
 甚深 (gambhīra, zab) にして、廣大 (udāra, rgya che)  
 を身とし、普ねく広がる光を持つ、普賢〔菩薩〕  
 に帰命する。

ちなみに、今、筆者が披見し得る梵文テキストは五種であるが、五種とも、この帰敬偈を冒頭に掲げている<sup>①</sup>。さて、帰敬偈を漫然と見ている時には、筆者には如何なる疑念も、問題意識も生じなかった。ところが、帰敬偈に対する注釈に目を通した時、何か釈然としないものを感じた。次に、注釈のひとつを見てみよう。現存する最古の注釈は、シャーキャブッディ Śākyabuddhi (660—720) のものである。彼は、『量評釈注疏』 *Pramāṇavārttikaṭīkā* において帰敬偈を以下のように注釈している。

世尊に対して、「分別の網を離れた方」〔と云い〕声聞と独覚等の境地 (yul) ではないので「甚深」〔と云い〕、一切の対象 (shes bya, jñeya) と有情のあらゆる目的 (don, artha) を満たすので「廣大」〔と云うのである。それは、また〕三身 (sku gsum, trikāya) 〔たる〕自性〔身〕 (ngo bo nyid, svabhāva) と受用〔身〕 (longs spyod rdzogs pa, saṃbhoga) と変化〔身〕 (sprul pa, nirmāṇa) と云うものがあるということである

(Je, 2b2-3)

筆者は、三身説についても全く無知であり、シャーキャブッディの注釈が、仏教学において一般的に承認され得るものであるのか否か、についてすら皆目わからない。しかし、筆者の知る限り、ダルマキールティは三身説など口にすることはなかったのである。シャーキャブッディの注釈は、少なくとも、ダルマキールティの思想に対するものとしては、ふさわしくないもののように思えた。

## II

ところが、先のシャーキャブッディの注釈は、チベットの学僧達にも受け継がれた。サキャ派 (Sa skya pa) の学僧セルドクパンチェン＝シャーキャチョク

デン gSer mdog paṅ chen Shākya mchog ldan (1428—1507) は、『広大なる論書量評釈の解説、普賢法海』 rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel rnam bshad Kun bzang chos kyi rol mtsho において、次のように帰敬偈を注釈している。

「分別の網を離れた方」は自性身、そして「甚深」は受用身、そして「広大」は変化身である<sup>②</sup>。

(Kha, 3a<sup>1</sup>)

シャーキャチョクデンは、このように、ごく簡単に注釈を提示するだけであるが、このシャーキャブッディ流の注釈は、彼のダルマキールティ解釈にとって決定的意味を持つものであった。シャーキャチョクデンは、別著『量の歴史』 Tshad ma chos 'byung において、

〔永遠に知覚外の存在 (shin tu lkog gyur, atyantaparokṣa) とは〕、仏陀の受用身と覚たる智慧法身と自性身の如きものである<sup>③</sup>。(38a<sup>5-6</sup>)

と述べ、自性身等を、凡夫にとって絶対に認識出来ない対象〔=永遠に知覚外の存在〕であると規定した上で、さらに、同じく『量の歴史』において、次のような見解を提示する。

〔『量評釈』〕「量成就」(tshad ma grub pa, pramāṇasiddhi) 章で説明された一切智者 (thams cad mkhyen pa, sarvajña) 〔=仏陀〕を証明する正理 (rigs pa, nyāya) そのすべても、究極的には、聖典 (lung, āgama) に依存するものにすぎない。なぜなら、聖典に依存せずしてそれらの証因 (gtan tshigs, hetu) の三相 (tshul gsum, trairūpya) は成立しないからである。作られたものという証因によって音声は無常であると証明できるようなものと同じではないのである。…中略…特に、そのようなものを事物の力から生じた正理 (dngos po stobs zhugs kyi rigs pa, vastubalapravṛttanyāya) によって証明できるというのは、『量評釈』の御著者 (rnam 'grel mdzad pa =ダルマキールティ) の善説ではないのである。つまり、事物の力から生じた正理によって成立するのならば、永遠に知覚外のものである必要はなく、永遠に知覚外のものならば、〔その〕証因が聖典に依存しないのは矛盾なのである<sup>④</sup>。(37a<sup>7</sup>—37b<sup>3</sup>)

筆者には、シャーキャチョクデンのこの見解は、ダルマキールティのそれから全く逸脱したもののように思えるが、シャーキャチョクデンは、何の根拠もなしに、この見解を提示したのではないことも、確かである。帰敬偈に対するシャーキャブッディ流の注釈が、彼の見解に揺ぎない根拠を与えてしまっているからある。つまり、シャーキャチョクデンは、帰敬偈に対するシャーキャブッディ流の注釈に依存し、そこで示された自性身等を永遠に知覚外のものと規定した上

で、『量評釈』「量成就」章で言及される仏陀にも、同じ規定を当嵌めたのである。だが、シャーキャチョクデンに、どのような有力な根拠があろうとも、彼が、ダルマキールティの見解を完全に誤った方向に導いたことは否めない。ダルマキールティにとって、仏陀は永遠に知覚外の存在などでは決してない。ダルマキールティにとって、仏陀とは、四聖諦を熟知している者のことであり、また、その四聖諦は、凡夫に閉ざされた真理ではなく、凡夫の推理 (anumāna) の対象となるものだからである。そのことは、『量評釈』から明瞭に見て取れることである。

ダルマキールティは、『量評釈』「量成就」章において、次のように述べている<sup>⑤</sup>。

捨てられるべきものと取るべきものに関する真実 (heyôpādeyatattva) を、その手段と共に教示する方 [= 仏陀] が、量であると承認される。決して、一切を教示する者が [量] なのではない。k . 32。

遠方 (dūra) を見ても、見なくても、求められた真実を見ることが量である。もし、遠方を見る者が量ならば、さあ、驚を礼拝しよう。k . 33

また、『量評釈』「為自比量」svārthānuāṃna 章 k . 215の自注 (Gnoli ed. p.108, ll. 24-25) においてダルマキールティは「四聖諦が推理の対象であること」を明言しているのである<sup>⑥</sup>。

### III

さて、シャーキャブッティ流の注釈は、結果的に、シャーキャチョクデンの如き悪しき見解を生み出す引き金になったことは確かだとしても、真の責任は、シャーキャブッティ流の注釈にあるのだろうか、それとも、帰敬偈自体に、そもそも、そのような注釈を導き出す要因があるのだろうか。これに関しても、筆者は、何ら明確な答えを持ち合わせていないが、帰敬偈について、きわめて興味深い見解を、ここで紹介しよう。

その見解は、ヤマーリ Yamāri が提示するものである。ヤマーリは、『量評釈 莊嚴注疏・極円浄』*Pramāṇavārttikālaṃkāra-Suparīśuddhā* において次のように言うのである。

それ故、〔『量評釈』冒頭の〕二偈〔帰敬偈と造論偈〕は、注釈者(rnam bshad byed pa)によって作られたのである。(Phe, 181b<sup>7</sup>)

ヤマーリによれば、帰敬偈は、ダルマキールティの作ではなく、注釈者による捏

造なのである。ヤマーリの見解は、いやが上にも、想像力をかき立てるものである。もし、その注釈者が、シャーキャブッディ流の注釈を意図した上で、帰敬偈を捏造したのならば、どうであるか。さらに一步踏みこんで、その注釈者がシャーキャチョクデンの如き見解を生み出す道すら用意したのならば、我々は、この帰敬偈をどう扱えばよいのだろうか。筆者には、取るべき手段はひとつしかないように思われる。すなわち、『量評釈』の帰敬偈は、速やかに、テキストから除去されねばならないのである。また、もし、ヤマーリの見解を省みず、テキストに帰敬偈を残して置くにしても、シャーキャブッディ流の注釈に対しては、十分注意を払う必要があるだろう。ここで、現時点での筆者の考えを素直に述べて、結論としたい。この帰敬偈は論理的思考に基づいて仏教を模索したダルマキールティの思想を台無しにする危険性を多分に持っているものであり、そのような危険なものが、冒頭に置かれているとすれば、『量評釈』に対する理解は、全く誤った方向に流れてしまうであろう。したがって、帰敬偈は断固テキストから除去されるべきなのである。

さて、この短く拙い稿もこれで一応の結論を得たことにし、最後に、チベットのゲルク派 (dGe lugs pa) の学僧ケードゥップジェ = ゲレクペルサンポ mKhas grub rie dGe legs dpal bzang po (1385—1438) が伝える、帰敬偈にまつわる異端的な見解もあわせて、紹介しておこう<sup>⑧</sup>。その見解を一気に論じ尽くすだけの知識は、今の筆者には欠如しているので、ほんのさわりの部分だけの紹介である。ケードゥップジェ著『広大なる論書量評釈の広説、正理大海』*sGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel rgya cher bshad pa Rigs pa'i rgya mtsho* には、次のような見解が記されている。

智慧が未熟(blo gros gzhon nu) で学説(grub mtha') の大海の彼岸に到らないある者は言う。「『量評釈』の見解においても、自性身とは、法界(chos kyi dbyings, dharmadhātu) の智慧 (ye shes, prajñā) であり、それは、また、常住・堅固・自然の自性(rtog brtan lhun grub rang bzhin) によって光 [が] 虚空 [に対するが] 如く、一切を遍満し、言葉と分別 (sgra rtog) <sup>⑨</sup>の直接的対象(dngos yul) ではなく、色法(bems po'i chos) を超えた絶対否定(med dgag, prasajyapratishedha) ではなく、断空(chad stong) ではないのである」<sup>⑩</sup>(Tha, 6a<sup>5-6</sup>)

この実在論的な見解も、やはり、帰敬偈をめぐる提示されたものである。帰敬偈とそれに付随するシャーキャブッディ流の注釈が、仏教論理学にもたらした弊

害は、量り知れないほど、強力なものなのである。

### 注

- ①五種のテキストとは、(A) Gnoli R(ed): *The pramānavārttika of Dharmakīrti*, Serie Oriental Rome XX III (B) Malvania, D(ed): *Svārthānumāna-pariccheda*, Hindu Vishva-vidyalaya Nepal Rajya Sanskrit Series, vol. II (C) Sāṃkṛtyāyana, R(ed): *Karnakagomin's Commentary on the Pramānavārttikavṛtti of Dharmakīrti* (D) Shastri, S. D(ed): *Pramānavārttika of Acharya Dharmakīrti with the Commentary 'Vṛtti' of Acharya Manorathanandin*, Bauddha Bharati Series 3 (E) Miyasaka, Y(ed): *Pramānavārttika-kārikā*
- ②拙稿 『チベットの論理学書における「解脱と一切智者」の証明について』日本西藏学会々報 第33号 S. 62 p. 12参照
- ③注②の拙稿 p. 12および p. 14の注(14)参照
- ④注②の拙稿 pp. 9—11および拙稿 「初期ゲルク派の聖典観について」駒沢大学仏教学部論集 第18号 S. 62 p. 95参照
- ⑤この二偈に対する説明は、川崎信定 「一切智者の存在論証」『講座・大乘仏教』9—認識論と論理学 春秋社 S. 59 pp. 308—309参照
- ⑥若原雄昭 「アーガマの価値と全知者の存在証明—仏教論理学派に於る系譜—」仏教学研究, S. 60 p. 59 参照
- ⑦ケードゥプジェも同書で次のようにシャーキャブッディ流の注釈を提示している。  
〔捨離(spangs pa)とは、分別の網を〕「離れることを身とする」と言われ、その捨離が自性身である。「甚深を身とする」と言うことによって、受用身が説かれている。すなわち、声聞・独覚・凡夫(so skye)の境地ではないので「甚深」と言われるのである。「廣大を身とする」と言うことによって、変化身が説かれている。すなわち、それは、所化(gdul bya)の能力に応じて、多様な相として現われ、声聞・独覚・菩薩・凡夫等という浄・不浄の多様な所化を直接の境地としているので「廣大」と言われるのである。(Tha, 5a<sup>6</sup>-5b<sup>2</sup>)
- ⑧ sgra rtog には「言葉による分別」という訳も可能である。二種の訳のうち、どちらが適切であるのか、判別出来なかった。
- ⑨ケードゥプジェは、この見解を詳細に否定しているのであるが、筆者には理解不能な部分が多いので、本稿で紹介し得なかった。

### 使用テキスト

ダルマキールティ

*The Pramānavārttika of Dharmakīrti* ed. by R. Gnori

*Pramānavārttika-kārikā* ed. by Y. Miyasaka

シャーキャブッディ

*Pramāṇavārttikaṭīkā*, sDe dGe ed. No 4220

ヤマーリ

*Pramāṇavārttikālamkāraṭīkā-Suṅgārasūdhā*, sDe dGe ed. No 4226

シャーキャチョクデン

*rGyas pa's bstan bcos Tshad ma rnam' grel gyi rnam bshad Kun bzang chos kyi rol mtsho*, The Complete Works vol. 18

*Tshad ma chos 'byung*, The Complete Works vol. 19

ケーブドゥブジェ

*rGyas pa'i bston bcos thad ma rnam 'grel gyi rgya ches bshad pa Rigs pa'i rgya mtsho*, Tohoku No 5505

1989, 7/1脱稿

補注

①テキスト（Miyasaka, ed.）'phrol を改めた。